

特集

まつりのあと 受け継がれる万博のレガシー

2025年4月13日から半年間にわたって開催された2025大阪・関西万博が10月13日に閉幕しました。資材高騰や人手不足等を背景に一部の海外パビリオンの開館が遅れるなど想定外の事態がありながらも、SNSでの来場者の口コミなどによりその面白さが広く伝わり、累計来場者数は2,900万人に達しました。本号では2023年より続く大阪・関西万博特集の締めくくりとして、万博を振り返ります。



万博のシンボル 大屋根リング

会場を囲む全長約2kmの木造建築物「大屋根リング」。伝統的な貫接合に現代の工法を加えたこの木造建築物に圧倒される来場者の声が多く聞かれた。



貫接合のダイナミックな木組みは多くの人を魅了した



海と陸をつなぐ大屋根リング

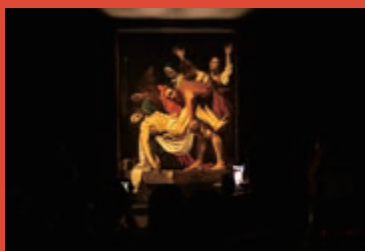
世界の英知が集結した 大阪・関西万博

184日間に2,900万人以上が来場した大阪・関西万博。会場内の施設やパビリオンには先の時代を見据えたさまざまな取り組みがみられました。期間中の様子を写真と共に振り返ります。

文・構成／(株)ジェイクリエイト



連日多くの人々が並んだイタリア館



左／カラヴァッジョ作「キリストの埋葬」(17世紀)



右／毎日午後6時からは、円形劇場にて多彩なライブパフォーマンスが繰り広げられた
Courtesy of Italy Expo 2025 Osaka

万博屈指の人気パビリオン イタリア館

「芸術が生命を再生する」をテーマにしたイタリア館には、彫像「ファルネーゼのアトラス」をはじめ傑作の芸術作品が展示されていることから、連日長い行列ができていた。

彫像「ファルネーゼのアトラス」(2世紀)は後に大阪市立美術館へ移され、特別展「天空のアトラス イタリア館の至宝」が開催された



左/日本の木材を使用した神殿のようなウズベキスタン館

©Art and Culture Development Foundation under the Cabinet of Ministers of the Republic of Uzbekistan

右/木材で3次元曲線を表現したオーストリア

Photo: Stefan Schilling/
Credit: Expo Austria



会場図

木造・木質化パビリオンが存在感を放つ

国産材やCLTを用いた木造・木質化のパビリオンが多くみられ、木造化が世界中で進められていることが感じられた。



上/約560枚ものCLTが用いられた日本館
下/柱、梁、床、壁に日本産のカラマツとヒノキが1,000㎡使用されたスペイン館 ©Acción Cultural Española (AC/E)

ドイツ産のCLT、日本産の杉、合板など多様な木材を使用したドイツ館
© German Expo Pavilion Hotaka Matsumura